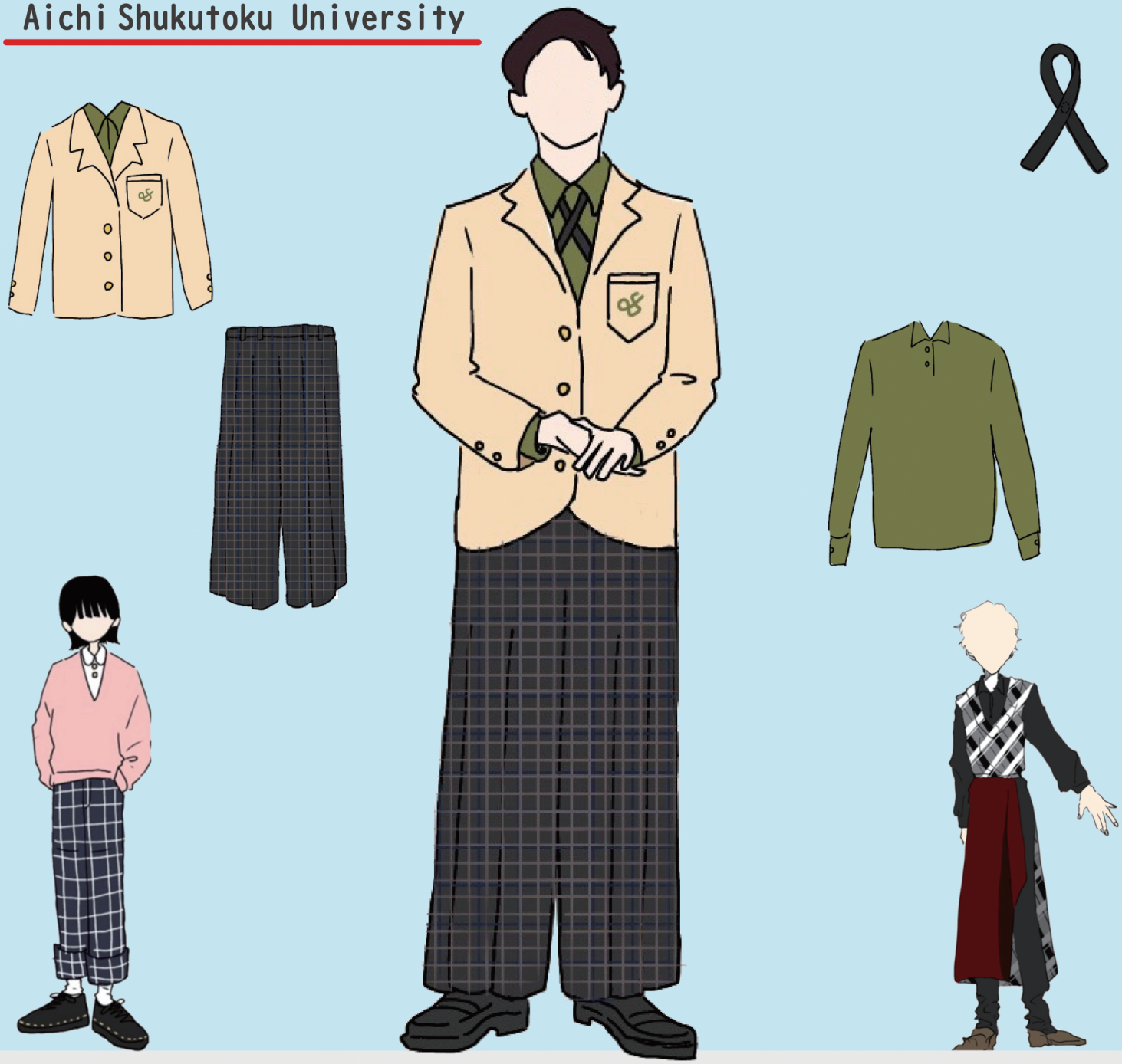
NEWS LETTER

ジェンダー・女性学研究所

March 2023　52号

愛知淑徳大学
Aichi Shukutoku University



ステレオリムーブ課で

ジェンダーレス制服、つくります。

特集　ジェンダーレス制服プロジェクト始動！

担当メンバー：野村 花音、夕部 蓮太、林 桃歌、羽生 勇太、柴田 莉穂、後藤 優花、桑江 愛瑠、石塚 江莉奈、廣田 上、松村 佳乃、石川 葵、祖父江 梨子、井戸田 奈穂

ジェンダーレス制服プロジェクトとは

このプロジェクトを始めたきっかけは、2021年度に岡崎西高校 放送部の皆さんからのインタビューを受けたことや長久手市のジェンダーレス制服導入などがあります。その中で「ステレオリムーブ課らしい、男女が着られる全く新しいジェンダーレス制服を作ったらどうなるだろう」という話からプロジェクトが始動しました。

学校制服の歴史

1919年
- 山脇高等女学校
- 国内初の洋装制服（着物が高価なため）

1950年代
- 詰襟・セーラー服の復活
- 経済成長に伴う化学繊維の普及

2020年代
- 女子スラックスの浸透
- 男女兼用のデザイン、ネクタイ・リボンの選択が可能

これまでの流れ

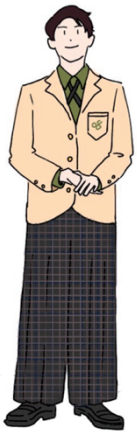
６回のミーティング（8/26、9/9、10/14、10/26、11/11、11/16）を行い、制服のコンセプトやデザインを決め、10種類のデザイン案を評価してもらうアンケートを行いました。

ミーティング風景

期間：2022/11/21～2022/12/16
対象：愛知淑徳大学１年～４年
人数：393人（男性85人、女性305人、その他3人）
文学部：35人　人間情報学部：45人
心理学部：157人　創造表現学部：40人
健康医療科学部：22人
福祉貢献学部：14人　交流文化学部：23人
グローバル・コミュニケーション学部：15人

アンケート結果 | アンケートで評価が高かった制服デザイン案を紹介します！

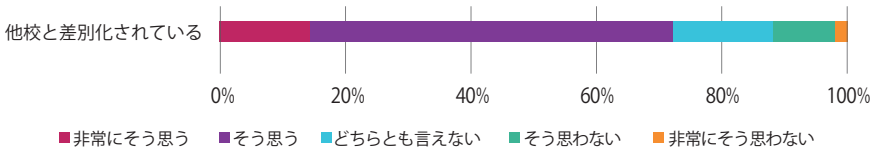
①「学校らしさ×品格×差別化」



Point!

・ベージュのブレザーにチェックのキュロット
・品格のある制服
【制服の品格守りつつ、他校との差別化を意識しました】

〈デザイン①の結果の特徴〉

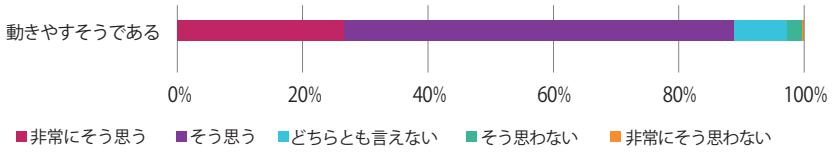


②「動きやすさ×着心地×遊び」

Point!

・ピンクのニット
・気軽に着ることができる
【動きやすさや着心地を追求するだけではなく、随所に遊び心を取り入れました】

〈デザイン②の結果の特徴〉

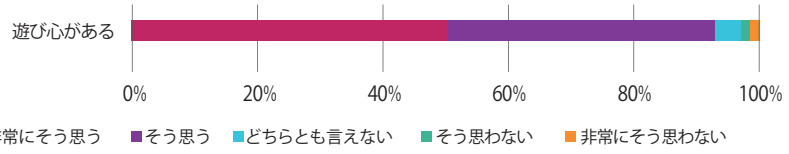


③「従来のジェンダーレス制服との差別化」

Point!

・赤のラップスカート
・全く新しい制服
【制服の概念に囚われすぎないことで、新たな可能性を見出しました】

〈デザイン③の結果の特徴〉



これらのデザイン案を基に、実際に制服を作ります！

（文章：野村 花音、夕部 蓮太）

シリーズ

ゆるりと巡るジェンダー研

第3回　日本女子大学現代女性キャリア研究所

＜現代女性キャリア研究所とは＞

現代女性キャリア研究所は、日本女子大学にて2008年に設立された施設です。この研究所では、日本女子大学がその創設時より掲げてきた女性教育の伝統と理念を変貌する現代に生かすために、現代の女性とキャリアを取り巻く諸問題を調査研究し、その成果を本学の教育のみならず、広く社会へ発信することを理念として掲げています。

＜日本女子大学の個性豊かな施設＞

日本女子大学には、個性的な施設がたくさんありました。今回は、そのうちのいくつかを紹介します。百二十年館は、設立120周年を記念して2021年に建てられたもので、白を基調としたガラス張りの現代的な建物が目印となっています。この中には、最新の設備を整えた教室や研究室だけでなく、学生たちの憩いの場や意見交換の場として利用できるスペースも設置されていました。成瀬記念館分館は、1901年の大学創設時に建設された教師用住宅を改修した施設です。ここは、創立者で初代校長も務めた成瀬仁蔵氏が1919年に没するまで住んでいた建物でもあることから旧成瀬仁蔵住宅とも呼ばれています。古民家のような外観が歴史的でとても趣深い印象を感じました。左の写真に写っている成瀬記念館は、赤レンガ仕立ての建物です。レトロでとても落ち着く雰囲気でした。今回取材をさせていただいた現代女性学研究所はこのすぐ横にある建物に入っており、こちらも同じく赤レンガ仕立てとなっています。

＜現代女性キャリア研究所に突撃！＞

現代女性キャリア研究所の入り口は、タイトル横の写真にも写っている銀色に光り輝く看板が目印になっています。中に入ると、左手に右の写真に写っているテーブルが置かれています。このテーブルの上には、研究所が発行しているパンフレットや、研究所が開催するイベントの資料などが並べられており、学生は気になったものを持ち帰れるようになっています。また、左側には掲示板も置かれており、そこを確認することでお知らせや実施予定のイベントを気軽に確認できます。研究所の中は、写真にも写っているように明るく、誰でも入りやすい雰囲気になっていました。

テーブルの上に置かれた花もワンポイントの華やかさを演出していておしゃれですね。また、テーブルの奥には研究所に所属する先生方がいるので、学生たちは掲示されているお知らせの詳細や、気になっていることをいつでも自由に聞くことができます。

先ほど紹介したテーブルの反対側には、書庫への入り口があります。書庫の中には、現代女性キャリア研究所が所有するキャリアやジェンダーなどに関連した書籍が置かれています。そして、これらの書籍はなんと移動式の棚に収納されており、横にあるスイッチを押すことで棚を自由自在に移動させることができます。移動式の棚なんて、なかなか見ることがないですよね。私たちはこれを見て、少しテンションが上がってしまいました。専門的な書籍を大量に揃えているので、研究所が取り扱っている分野に関して知りたいことがあれば、確実に十分な情報を得ることができるでしょう。この中にはテーブルも設置されているため、ゆっくりと書籍を閲覧することができます。

左の写真に写っている積み上げられた箱を見てみてください。ただの紙束や使い終わった資料が大量に入っているのではありません。これらの中には、現代女性キャリア研究所が設立されてから積み重ねられてきた歴史のある資料が詰まっています。しかし、時間が経っていることから、これらは気軽に触れて閲覧することができません。そこで、これらの資料をデジタル化して、気軽にいつでも閲覧できるようにする試みが進んでいるのです。

＜主な活動内容＞

現代女性キャリア研究所では、主にシンポジウムや講演会といったイベントの開催や、日本女子大学の生涯学習センターと協力してリカレント教育やキャリア支援教育の実施を行っています。また、日本女子大学では近年、大学卒業後に就職しても育児や進路変更などで離職した女性に1年間のキャリア教育を通して再就職を支援する日本初のリカレント教育課程を設立しています。今回の取材では、リカレント教育課程にも深くかかわっている第3代所長の坂本清恵さんと、助手の鈴木紀子さん、御手洗由佳さん、盧回男さんの4名に女性とキャリアについてお話を聞きました。

＜リーダーになる女性を創るリカレント教育＞

女性の職業生活は結婚・出産・育児によって途中で中断し「M字カーブ」と言われるものを形成していますが、解消につながる人材を輩出するのがリカレント教育であると仰っていました。また、これからは大学卒業後に“学びなおし”をする人が増えるのではないかと考えているそうです。実際、日本女子大学リカレント教育課程は夜に授業を行っていることで働きながら学ぶことができる環境を作っています。このように、女性が充実したキャリア・リーダーになるための支援をしていることがうかがえました。

＜地域による女性の働き方への意識の違い＞

つぎに、愛知と東京に所在する双方の大学における学生のキャリアプランのちがいなどについて経験等を交えて話していきました。

まず、愛知の進学や就職には地元志向の傾向があることが話題に上がりました。理由として、「地元に大企業があることや地元企業に就職するためには地元の大学で充分であることから外に出る必要性をあまり感じていないのでは」という話が挙がりました。また、Uターン就職という形で大学卒業後に愛知に戻る学生（主は公務員として）が多いようです。実際、ステレオリムーブ課の学生やその周りでも地元志向の考えの人が多いです。また、親が生まれも育ちも愛知であると（特に女性は）進学や就職する際にあまり外に出るのを快く思われないそうです。

また、「トップになれない」と思っている女性が多いのではないか、という話もありました。坂本所長は、「実際日本では女性社長の割合が多い訳ではありませんが、これから社会に出ていく女性が同じようになれない訳ではない。そのことを理解してもらう為には、小学生の頃からの教育が重要だ。まずは選択肢がたくさんあることを知る、そして大学生になってからは女性社長など高い地位で活躍している方のロールモデルをたくさん見る機会を作る。それによって意識を変えていくことができるのではないか。」と仰っていました。実際にそのための活動として、小学生向けの楽しく参加できるイベントや、大学生向けの資格取得に関するイベントといった幅広い年齢層を対象としたキャリア支援教育を実施しているそうです。

＜ステレオリムーブ課の感想＞

今回の取材を通して、現代女性キャリア研究所では、日本女子大学の学生だけでなく、少学生から社会人までの幅広い年代に対して支援を行っていることを実感しました。また、女性が社会とつながり続けることの重要性を知ることがでした。約2時間にも及ぶ取材にお付き合いいただき、ありがとうございました。

（後藤 優花、羽生 勇太）

日本女子大学 現代女性キャリア研究所
所　長：坂本 清恵
所在地：東京都文京区目白台2-8-1　成瀬記念館奥
日本女子大学現代女性キャリア研究所

2022年度のステレオリムーブ課の活動

今年度のステレオリムーブ課はメンバーを大幅に増やし、全体の半数が新規加入者で占めるほどパワーアップしました。フレッシュ感満載でスタートを切った私たちの1年間の活動をご紹介します。

Twitterを開設しました！

右のQRコードから、ぜひ見てみてください！

<6月>
- 第1回 顔合わせミーティング
- 第1回オープンキャンパス参加

<7月>
- 研究所主催イベント『自分らしいスーツの着こなし ー就活・社会人のためにー』告知ポスター作製、イベント運営補助
- 第2回オープンキャンパス参加
- ジェンダーレス制服制作プロジェクト始動（現在進行中）

<8月>
- 日本女子大学現代女性キャリア研究所取材

<9月>
- 第3回オープンキャンパス参加

<11月>
- 名古屋西高等学校からジェンダーレス制服に関するオンラインでの取材依頼
- 第41回定例セミナー「”ジェンダー不平等国”で生きていく。～キャンペーンCM制作から見えてきたこと～」告知ポスター作製、セミナー運営補助
- ニューズレター52号の本格的な編集作業開始

進行中の制服プロジェクトに、高校生の皆さんが大きな関心を寄せてくれたことを、とても嬉しく思いました。

担当企画毎にメンバーがアイデアを出し、各方面への取材や原稿執筆を分担して、このニューズレターが完成しました。充実した内容をお届けできたと自負しています。

（羽生 勇太）

シリーズ

学内にあるジェンダー

今、就職活動とジェンダーに対する関心が広まりつつあります。男性・女性“らしい”リクルートスーツの着用、面接での出産・家庭に対する質問、性別に準拠した職の制限など、例を挙げればキリがありません。今回はそんな就職活動×ジェンダーに関して、2名の学生から意見を聞いたプチ出張版「学内にあるジェンダー」です。

- 「女性社員/役員（管理職）の割合〇%以上！」などのように、女性活躍のアピールが激しく、就活生が求める情報と企業の出す情報との間にすれ違いを感じる。
- 服装自由などのように就活生の個性を認める場は増加しているが、社会人サイドの個性が見えづらいため、社会全体として個性を認める仕組みづくりをするべきだと感じる。

人間情報学部　Aさん

- 男性のリクルートスーツでは靴下着用であるのに対し、女性のリクルートスーツ（パンツスタイル）ではストッキングを着用するという文化が根強く残っていると感じる。
- 企業内託児所を紹介する際、「働くママの味方！」などの記載が多く、未だ家庭内分業を暗示するかのような文言が見受けられると感じる。

ビジネス学部　Bさん

みなさんの思う就職活動×ジェンダーの形はどのようなものですか？ 是非考えてみてくださいね。
そして、自分の色を出しながら今後の就職活動、果ては人生を彩っていきましょう！

（桑江 愛瑠）

Cinema / Book Discovery

Cinema

『リリーのすべて』

トム・フーパー監督 2016年

二人の画家の愛の物語。ゲルダが“リリー“をモデルに描いたことで、二人の生活は一変する――。

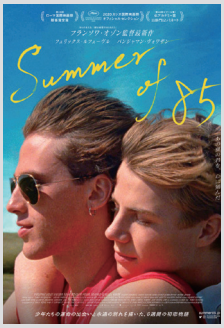
世界で初めて性別適合手術を受けたリリー・エルベを題材にした映画です。当事者と周囲の人々はこの現実にどう向き合って生きていくのか、考えながらご覧ください。20世紀のデンマークとパリの風景も見どころのひとつです。（石塚 江莉奈）

『Summer of 85』

フランソワ・オゾン監督 2021年

1985年夏のフランス。進路に悩む16歳の少年アレックスは、自然体で飄々とした18歳のダヴィドと出会い、惹かれ合う……。

当時を彷彿させるような全編16mmフィルムで制作する映像へのこだわりや、舞台である海辺の街の美しい景色にも目を奪われる作品です。初恋のほろ苦さを思い出させてくれるような名作でした。（後藤 優花）



『エイリアン』

リドリー・スコット監督 1979年

1970年代では珍しく、勇敢な女性主人公Ripleyが宇宙でエイリアン（地球外生命体）と戦うSFホラー映画です。

「エイリアンを倒す」という目標を宇宙船乗組員が掲げ、エイリアンと対峙していきます。その空間に「ジェンダー」という言葉は存在しません。最後までハラハラドキドキさせられっぱなしですが、「胸熱」な映画です。（野村 花音）

『RENT』

クリス・コロンバス監督 2005年

1989年のニューヨークで毎月の家賃も払えないほどの貧しいアーティスト達の日々を描いたミュージカル映画です。

同性愛を含めた様々な問題に向き合っていく彼らの生きざまを、数々の名曲に乗せてご覧下さい。（廣田 上）

Book

『同志少女よ、敵を撃て』

逢坂冬馬著 早川書房 2021年

第二次世界大戦下、各国が「男女の役割」を国民に求める中、唯一女性兵士を前線に送ったソ連。

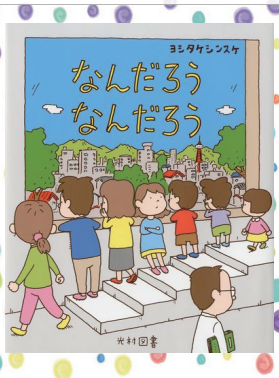
女性狙撃兵訓練学校に入校し狙撃兵となっていく主人公が戦争下で触れる様々な立場の「男」と「女」。次第に内面が変わっていく彼女が見つける真の「戦うべき敵」とは何か、見届けてほしいです。（祖父江 梨子）

『なんだろうなんだろう』

ヨシタケシンスケ著
光村教育図書 2019年

日常の中でふと湧いては消えていくような、当たり前と考えて気にも留めないようなことを、様々な角度から追究するお話です。ヨシタケシンスケさんの絵がとてもかわいらしいのでぜひ手に取ってみてください。新しい価値観がきっと生まれるはずです。

（井戸田 奈穂）



シリーズ

職業を選ぶ

好きな救命の道を後悔なく進む

健康医療科学部　スポーツ・健康医科学科　救急救命学専攻2年

江口 菜月さん

医療が好きだと気づいたのは、小・中学校での理科の授業の時である。人間が多数の細胞で構成されていることや、腕一つ動かすための脳の動きなど「人間の体の複雑さ」に衝撃を受けたことがきっかけだった。

高校の進路選択の際、もともとは経済系の大学に進もうと思っていた。しかし私の性格上、好きではないことを４年間学び続けることはできないと気づいた。大学に行くならば自分の好きなことを学びたいと思い、最終的に救急救命を学ぶことができる本学の健康医療科学部への進学を決めた。

私が目指している救急救命士という職業は、患者さんの搬送など力仕事も多いため、男性の比率が高い職業である。しかし、女性だからこそ必要とされる場面もある。例えば、妊婦さんを緊急搬送中に、急遽車内で出産をすることになった場合、同乗している救急救命士が補助しなければならない。いくら緊急事態とはいえ、自分の出産を男性に介助してもらうことに抵抗がある人も多いだろう。そんな時、女性がいれば患者さんも多少なりとも抵抗感がなくなる。男性が優位になることも多いが、女性にしかできない仕事も多くあると感じる。

救急救命士は人の命に携わる仕事である。熱意があり、命を預かる責任が持てる、そんな人がやるべき仕事だと思う。男性優位の職業だからこそ、女性は男性の何倍も努力しなければならないが、筋力も国家試験も努力でカバーできる部分がほとんどだ。本気で目指しているからこそ、男性より不利であっても努力できる。

私は、今やっておいた方がいいことは、今しておく方がいいと思っている。後悔はしたくない。だからこそ、救急救命士国家試験合格を目指して頑張っていきたい。

（取材：松村 佳乃）

保育士として働きやすくするために

福祉貢献学部　福祉貢献学科　子ども福祉専攻4年

早川 侑那さん

小学生の頃から保育士になりたいと思っていた。普段から近所の年下の子どもと遊ぶ機会が多かったこともあり、子どもが好きだったからである。そのため、保育士資格・幼稚園教諭1種免許が取得できる福祉貢献学部福祉貢献学科子ども福祉専攻に進学した。

子ども福祉専攻は、1学年51名中、女性は48名、男性は3名である。実際の現場でも、女性の保育士がほとんどで、男性の保育士はとても少ない。しかし、保育を学んだり、実習に出かけたりする中で、女性だけでなく男性の保育士が増えると良いと思う場面がいくつもあった。

一つ目は、女性と男性では、子どもとの関わり方が違うように感じたことである。例えば、どちらかというと女性は繊細な関わり方、男性は力強い関わり方が得意な印象がある。もちろん人によって個人差はあるが、二つの特徴が組み合わさることで、両者の不得意な部分を補い合うことができるのではないだろうか。

二つ目は、性別関係なく関わり合うことは、子どもにとっても、保育士にとっても良いことだと考えるからである。子どもにとっては、社会ではさまざまな性別の人が生活しているのと同じように、多くの時間を過ごす保育所でもさまざまな性別の大人と関わることができる。大人にとっては、同じ属性の人だけで固まらないことで、良い雰囲気づくりができると思う。

男性の保育士が少ない理由の一つに、保育士は女性向けの仕事であるという固定概念があると考える。これにより、男性が保育士として働きづらい状況になっているのではないか。そのため、男性も保育士として自然に働きやすくなると良いと思う。

（取材：水野 伶那）

エッセイ パパの育児休業体験記

心理学部准教授　蒲谷 槙介

わが家には五歳になる長男と一歳になる次男がいます。長男誕生時は妻だけが育休を取得したのですが、もし第二子が授かれば今度は私も育休を取ろうと決めていました。そのためのささやかな下準備として、私は心理学部の先生方に向けて隙あらば「次は育休を取ります！」と宣言するようにしていました。それが功を奏したか、第二子出産予定につき2021年度の後期の途中から年度末まで育休を取得したい旨を申し出たときも、心理学部では「男なのに育休？」というような反発は一切ありませんでした。

反発はなかったものの、卒論指導ゼミをはじめとした主要授業のみならず学部の重要校務も担当中の教員が、2021年6月末に育休取得を宣言し、その4か月半後から実際に休業するという急なスケジュールに対しては、困惑の声もありました。特に私が担当する卒論生たちにとって、卒論を仕上げる最も重要な時期にいきなり指導教員がいなくなるのは天変地異に他なりません（サバティカルとは異なり、妊娠が安定期に入るまでは具体的な予告がしにくい状況は頭を悩ませました）。学生数があまり多くない他大学では、こういった場合に他の専任教員が卒論生を引き継ぐという対応も比較的容易にできるのかもしれませんが、本学の心理学部では難しいことでした。

一般に、男性が育休を取得する場合、「自分が出産するわけではないし育休中に遠隔で仕事をすれば？」という趣旨の理不尽な提案をされることがあるようです。卒論指導に関してはなかなか代理の担当教員を見つけることができず、この「育休中に遠隔で…」という悪魔のプランに手を出すかと諦めかけた時期もありました。幸い、3年ゼミは学外の信頼できる非常勤講師の先生に、4年ゼミは心理学部の大ベテランの先生にお引き受け頂くことで話がまとまり、さらに私が当時担当していた教務委員の仕事は、過去に教務委員の経験もある元学部長に代理でご担当頂くことが決まり、とても安心できる体制が整いました。当時の学部長や教務委員長のご尽力もあり、その他の科目の代理教員の確保など、ギリギリのスケジュールの中、必要な対応をスムーズに済ませることができました。この場を借りて、心理学部の皆様のあたたかなご支援に心より感謝申し上げます。

あとは育休開始日に向けてペースを上げて仕事をこなし、余裕をもって諸々の引継ぎを済ませておこうという魂胆でしたが、これは全くの誤算でした。出産予定日が金曜日だったため、翌週月曜日を育休開始予定日としており、出産予定日の直前まで授業をこなすスケジュールとなっていました。幸い安定期以降は妊娠の経過も順調だった妻に対して、「まだ授業やレポートの採点もあるから、きっちり予定日に産まれるといいな」などと冗談交じりに言っていたのですが、後日聞いたところでは、これは妻にとってかなりプレッシャーだったそうで、大いに反省しています。なお、次男はこんな楽観的な父親に鉄槌を下す決断をしたのか、予定日よりも約一週間早く元気に産まれてきました。結局、私は最後の一週間はほとんど仕事にならず、いろいろとやり残したまま育休に入ることに。今思えば、出産予定日より前から有給を組み合わせて早めに休業しておくべきでした。「男は自分で出産するわけではないからギリギリまで働ける」という見解を他人に押し付けるのは言語道断として、その見解を無批判に自分自身に適用してしまうのもまた大きな問題だったというわけです。

育休が始まるまでの体験談でここまで来てしまいましたが、実際に育休を取得してみて、「いかに無理なく職場復帰するか」を考えることの重要性も実感しました。私は職場復帰後に学部教務委員長を担当することになっていました。私の職場復帰予定日は4月1日、フルタイムの職に就いている妻も同日に復帰するため、次男も4月から保育園に入れることになったのですが、長男のときの経験に基づけば、1日2時間（！）という極めて短時間の慣らし保育から始まり、入園直後は不測の事態も多く、夫婦二人で最大限協力し合ったとしても正直仕事どころではありません。それを見越して、学部長と相談の上、教務委員長としての職場復帰は5月の連休以降にして頂きました。新年度、育休の終わりと同時にシャキッとデジタルに職場復帰できる、というイメージが私にもあったのですが、実際には思った以上にゆったりと、アナログに復帰していくのが精いっぱいでした。その点、職場復帰後の一か月間だけでも、重たい校務を免除して頂いたことは大変有難いことでした。

振り返ってみると、私は支援的な職場環境に大いに甘えることで、短期間とはいえ、かなりしっかりと有意義な育休を取ることができたのですが、このようなケースは残念ながら日本においてはまだ稀なのかもしれません。この反省点多めの体験記が一つの叩き台となって、後に続く人が多くなることを願うばかりです。

エッセイ 大人の側から研究対象とされる若者の性

立正大学文学部社会学科　非常勤講師　反橋　一憲

「草食（系）男子」いう言葉を聞いたことがあるだろうか。「草食男子」という言葉は、2006年にコラムニスト・深澤真紀が最初に使用したとされている。その後、2008年に哲学者・森岡正博やマーケティングライター・牛窪恵が「草食系男子」という言葉を広め、2009年には「草食男子」という言葉が流行語大賞トップテン入りした。ちなみに受賞者は深澤真紀に加えてドラマ「おひとりさま」（TBS系列で2009年放送）で草食系男子を演じた小池徹平だった。

この「草食（系）男子」という言葉は、若者（男子）の変化を示している。森岡正博は「草食（系）男子」の意味を、「新世代の優しい男性のことで、異性をがつがつと求める肉食系ではない。異性と肩を並べて優しく草を食べることを願う、草食系の男性」だと説明している（『草食系男子の恋愛学』）。「草食系男子」という言葉からは、積極的に性行動をとるわけではない若者（男子）の姿を読み取ることができる。

この「草食」という言葉に象徴されるように、若者の性行動が不活発化したとよく言われている。例えば、日本性教育協会によって6年に1回のペースで実施されている「青少年の性行動全国調査」によれば、キスの経験率は2005年をピークに減少傾向にある（図を参照）。

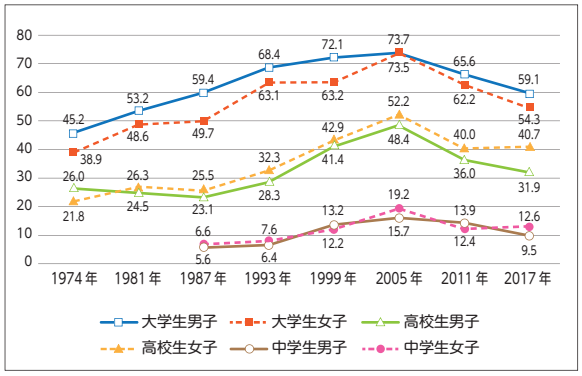


図　キス経験率の変化（%）

（出典）日本性教育協会編『「若者の性」白書　第8回青少年の性行動全国調査報告』（2019年、小学館）をもとに筆者作成

若者の性行動が不活発化している理由として何が考えられるのか。社会学者・片瀬一男は、草食化によって女性との対等な関係を築こうとするほど性行動が不活発化するというよりも、性行動によって生じるよくない結果（性感染症）を懸念して性行動が抑制されるというリスク仮説を示した。また、社会学者・林雄亮は恋愛におけるコミュニケーションが即時かつ適切なやり取りをしなければならない点で負担となるため、若者の性行動が抑制されるのではないかと説明する。若者である学生の皆さんにとっては、どれがリアリティのある説なのか。あるいはまったく別の説明が思いつくだろうか。ぜひ考えてもらいたいし、学生の皆さんの考えを聞きたいところである。

さて、そもそも論ではあるが、「若者の性行動が不活発化している」ことがなぜ研究の対象になるのかを考えてみたい。もちろん、「青少年の性行動全国調査」のデータを眺めてみると、2005年から減少に転じているのは気になる点である。減少に転じた理由を解明したくなるのはある意味当然であろう。

しかし、もっと考えてみれば、なぜ「青少年の性行動全国調査」が40年近くにわたって実施されてきたのだろうか。元々、「青少年の性行動全国調査」が開始された背景には、「若者の性が乱れている」などと若者の性が問題視され、実態を把握する必要性が言われたことがある。ここには、若者の放埒な性行動を何とかしたいという大人の意図が見え隠れする。しかも、時代が下ると少子化が進み、若者には結婚支援や子育て支援などを通して子どもを産み育てることが求められる。大人には、若者の性行動を「望ましい」ものへと仕向けようとする意図があるのではないか。

そもそも、大人は自分たちの関心から若者の性を研究対象にしようとする。そこには、若者が大人とは異なる存在であるという認識があるのではないか。「草食（系）男子」は、それまでの中高年層に想定されていた男性像とは異なる若者の姿だったのである。深澤真紀は後に、「草食男子」という言葉を使い始めた意図を、「モテることを自分の価値として、女性をトロフィー扱いするような団塊・バブル世代のオヤジたちに対して、女性をリスペクトでき、人間として対等に付き合える新しい世代の男性たちのことを正しく理解させたかった」と説明している[1]。

このように、若者の性行動が研究される背景には、それまでの若者像とは異なる若者の姿が現れたことにより、未知の存在を明らかにしたいという大人側の関心が見え隠れする。しかも、大人にとっては若者に対して望ましい性行動をとってほしいという期待さえある。若者の性は大人からの関心の的なのである。

言葉を選ばずに言えば、上の世代が自身の関心に基づいて、若者の行動を勝手に説明しているのである。学生の皆さんは、自身の世代の行動が上の世代から研究対象とされていることをどう思うだろうか。私も「若者」とは言えない世代になりつつある。ぜひ、学生の皆さんから率直な感想を聞いてみたいところである。

1）https://wpb.shueisha.co.jp/news/lifestyle/2016/10/23/74008/

第41回 定例セミナー

「“ジェンダー不平等国”で生きていく。～キャンペーンCM制作から見えてきたこと～」

11月21日（月） 2限：星が丘キャンパス、4限：長久手キャンパス

講師　繁澤 かおる 氏（東海テレビ放送株式会社）

今年の定例セミナーは、東海テレビの繁澤さんをお招きし、ご自身の手掛けられたキャンペーンCM制作を通して見えてきた〈ジェンダー不平等国・ニッポン〉について、お話しいただきました。繁澤さんご自身も、放送局に就職するまでは、〈ジェンダー〉を日常で意識することなく過ごしていたとのこと。それが一転、男性社会を絵に描いたような業界で働くうちに、言語化できないモヤモヤが積もっていったといいます。そこで、CM制作のテーマに掲げたのが、日常に潜むジェンダー不平等の問題。タイトルを策定したり、たくさんの人に長時間インタビューしたものを数分に編集したりする過程で、制作メンバーと膨大な時間をかけて議論を繰り返したのだとか。この話し合いから、多くが男性である作り手の側のジェンダー意識を共有できたことも収穫だったようです。一見華やかに見えるマスコミ業界ですが、女性が働き続けるのには、決して容易な環境ではありません。そのことをしっかりと伝えてくださったうえで、繁澤さんは、若い世代に芽生えている新しい意識について希望を感じておられます。それは、男性でも相手に心を開いて自分の弱みを伝えられる後輩が増えていること。これからはこうしたコミュニケーションが連帯を生み、むしろ強みになるのだとおっしゃっていました。多くの学生にとって、ジェンダーの問題は大学を出てから我が事として実感するものです。今回のお話は、卒業後を見据えた学生のキャリアビジョンにも活かされることでしょう。時間はかかるかもしれませんが、〈ジェンダー平等〉までの歩みは確実に拓かれているのだと信じたくなる90分間でした。　（文責　IGWS運営委員　小倉

2022年度研究所の一年

2022年度の研究所では、これまでコロナ禍のために中止されていたものが、久しぶりに復活しました。その1つが、授業のある月に一度行っていた、星が丘出張ジェンダー研です。2022年度より国際交流センターにご協力頂いて、グローバルラウンジで出張ジェンダー研の開催を始めました。開催日でない日にはグローバルラウンジの一角に研究所の蔵書を設置して頂き、星が丘キャンパスの学生にも研究所に親しんでもらえるようになりました。

また、2022年度の新しい取り組みとして、研究所の蔵書のテーマ展示を行いました。研究所には、2,500冊以上の書籍があります。展示をきっかけに、普段なかなか手に取ることのない本を借りる学生もいました。

次に研究所が開催したイベントで他ページに記載のないものを写真とともに紹介します。

- 4月：施設見学会開催…計3回開催し、合計９名の参加がありました。実施日以外にも今日説明して欲しいと研究所を訪れた学生がいて、研究所への関心の高さが窺われました。
- 5月：「ベルばらかるた会」…少女マンガのジェンダー表象研究がご専門の創造表現学部助教押山美知子先生にご協力頂き、かるたとりをしながら昭和の名作マンガ『ベルサイユのばら』の世界をジェンダーの視点から楽しく解説頂きました。
- 7月：研究所主催イベント「自分らしいスーツの着こなし ―就活・社会人 のために―」開催
- 1月：「第15回ジェンダー・ダイバーシティ視点の卒業論文・卒業制作報告会」…8名の学生が発表しました。

星が丘出張ジェンダー研

12月には、グローバルラウンジのイベント「言語テーブル」で韓国語が取り上げられる日に連動して「韓国×フェミニズム」というテーマで展示を行いました。韓国語で会話を楽しむ学生に韓国フェミニズムの書籍が数多く日本で翻訳され、出版されていることを知っていただく機会になりました。このテーマを事前に知って訪れてくれる学生もいました。

テーマ展示

4月：新生活に読みたい本
5月：漫画・アニメからジェンダーを考える
6月：女性と政治～女性参政権～
7月・8月：女性と政治～政治に参画する女性たち～
9月・10月：#metoo,#withyou ～声をあげる女性たち～
11月：韓国 × フェミニズム
12月：WE SHOULD ALL BE FEMINIST
1月-3月：3/8国際女性デーに向けて

（文責　IGWS事務職員　椿 加菜子）

ジェンダー・女性学研究所第52号ニューズレター 目次

★学生企画（ステレオリムーブ課）
・特集「ジェンダーレス制服プロジェクト始動！」…… 2〜3
・ゆるりと巡るジェンダー研第3回「日本女子大学現代女性キャリア研究所」…… 4〜5
・2022年度のステレオリムーブ課の活動／学内にあるジェンダー ……6
・Cinema／Book Discovery …… 7
・職業を選ぶ …… 8
「好きな救命の道を後悔なく進む」 江口 菜月さん（健康医療科学部2年）
「保育士として働きやすくするために」 早川 侑那さん（福祉貢献学部4年）

★教員エッセイ
「パパの育児休業体験記」 蒲谷 槙介（心理学部准教授）……9
「大人の側から研究対象とされる若者の性」 反橋　一憲（立正大学文学部社会学科 非常勤講師）……10

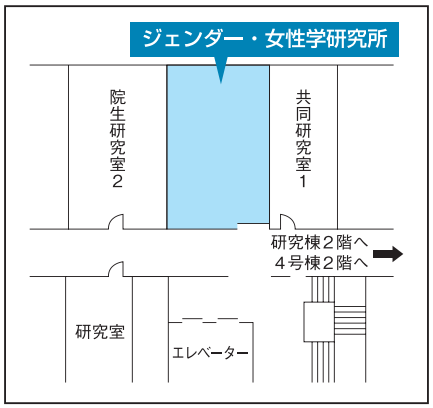
★第41回定例セミナー／2022年度研究所の一年報告……11

施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒でも大歓迎です！

開 室 日　毎週月曜日〜金曜日
開室時間　9:00〜17:00
場　　所　愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟　4階エレベーター前

ペット型ロボット“プレオちゃん”います。

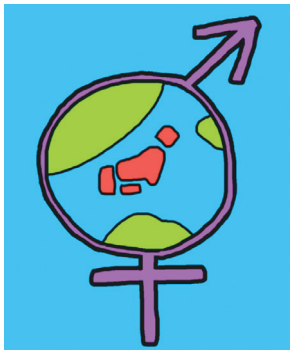


ASU・IGWS2022 年度

運営委員
坂田 陽子（所長兼）　外山 敦子　高原 美和　小倉 史　前田 惠子
大宮 摂子　江嵜 那留穂　菅野 淑　福本 明子

学生運営員ステレオリムーブ課
野村 花音　林 桃歌　羽生 勇太　柴田 莉穂　後藤 優花
水野 玲那　夕部 蓮太　桑江 愛瑠　石塚 江莉奈　廣田 上
松村 佳乃　石川 葵　祖父江 梨子　井戸田 奈穂

事務担当
椿 加菜子



編集後記

“ジェンダーレス制服プロジェクト”は現在サンプルを実際に縫製してもらっています。完成が待ち遠しいです。これを機に“ジェンダーレス”を今一度考えました。“女性らしさ、男性らしさ”をかき消し平均化することなのか、それともより良いところは残し強調しながら共存するのか・・・。回答への旅は続きます。最後になりましたが、事務職員として研究所を支えてくださった椿加菜子さんが3月末をもって退職されます。学生は寂しく思うでしょう。ありがとうございました。
（所長　坂田 陽子）

発行年月日：2023年3月1日
〒480-1197　愛知県長久手市片平二丁目9
Phone 0561-62-4111　ex. 2498
FAX　0561-63-9308
E-mail：igws@asu.aasa.ac.jp

表紙・裏表紙イラストは、林桃歌さん、後藤優花さん、夕部蓮太さん、石塚江莉奈さんに担当していただきました。